

回 覧

事 務 連 絡

令 和 2 年 1 月 2 1 日

十カ町会構成自治会 各位

川越市長 川 合 善 明
(公 印 省 略)

重要伝統的建造物群保存地区選定20周年記念行事実行委員会

実行委員長 永 谷 久

重要伝統的建造物群保存地区選定20周年記念行事「でんけん川越まちづくりシンポジウム」の概要版について(回覧)

時下、貴職におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。日ごろから、本市十カ町地区都市景観形成地域並びに伝統的建造物群保存地区のまちづくりにご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

この度、過日開催いたしました「でんけん川越まちづくりシンポジウム」の開催内容を掲載しました概要版を作成いたしましたので、回覧いたします。

シンポジウムの当日は、川越の蔵造りに代表される伝統的建造物群保存地区について、その歴史と今後のまちづくりを考える機会となり、約310名の参加者を得ました。ご協力いただき、ありがとうございました。

【事務局】

川越市 都市計画部 都市景観課

Tel 049-224-5961 (直通)

重要伝統的建造物群保存地区選定20周年記念行事実行委員会

幸町自治会、元町1丁目自治会、元町2丁目自治会、仲町自治会、川越町並み委員会、川越一番街商業協同組合、NPO法人川越蔵の会

重要伝統的建造物群保存地区選定20周年記念行事

でんけん川越まちづくりシンポジウム

発行：川越市都市計画部都市景観課 発行日：令和2年1月
連絡先：川越市都市計画部都市景観課 049-224-5961（直通）

概要版

令和元年12月1日に伝建選定20周年の記念行事を開催しました

去る12月1日（日）午後、川越市やまぶき会館にて、川越の蔵造りに代表される歴史的な町並みが、国の重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）に選定されて20周年を記念する、「でんけん川越まちづくりシンポジウム」が開催されました。

川越市における町並み保存の取り組みは、昭和40年代の蔵造りの保存活動にはじまり、昭和62年（1987）の町並み委員会発足など住民主体のまちづくりを経て、平成11年（1999）の重伝建地区の選定に至りました。

今回のシンポジウムでは、これまでの住民主体によるまちづくりの取り組みを振り返るとともに、川越と同じような特色をもつ地域の住民の代表を交え、歴史や文化を活かしたまちづくりの将来を考える機会となりました。

令和元年
12/1日

会場 川越市やまぶき会館ホール
時間 午後1時40分～
(午後1時開場、午後1時10分～川越市立初雁
中学校吹奏楽部による演奏)

内容 ● 講演講演
● パネルディスカッション
テーマ「住民主体のまちづくり」

重要伝統的建造物群保存地区選定20周年記念
でんけん川越
まちづくりシンポジウム
みんなで創る歴史と文化を活かしたまちづくり

入場無料

伝建地区写真パネル展
● 轄内各の会館に伝建地区は18ヵ所あります。そのうち
関東やその周辺地域を中心に、歴史的地域をめぐってパネル
展示します。● 11月28日～12月2日(木)

TEL 049-224-5961

川越市立初雁中学校吹奏楽部による記念演奏



顧問の村本先生・鈴木先生による指揮で、①ロマネスク、②パプリカ、③ミッキーマウスマーチの3曲を、時には踊りを交えつつ披露しました。

令和元年の埼玉県吹奏楽コンクール西部地区大会銀賞の実力をいかに発揮した、心にしみるすばらしい演奏でした。

開会あいさつ



宍戸副市長

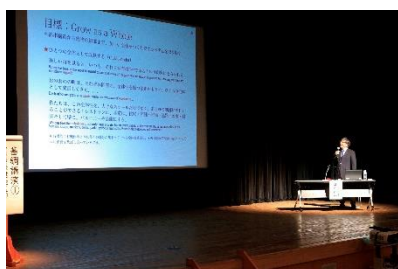


永谷実行委員長



三上市議会議長

基調講演①「川越伝建地区の過去・現在・未来」 福川裕一氏（千葉大学名誉教授）



伝建地区川越の特徴は、①大都市内にある、②大量の観光客、③住民による自主組織（川越町並み委員会）、と全国でも珍しい伝建地区です。「町づくり規範」に基づく建築の事前協議を、伝建地区になる前から行うなど、行政に拠らない住民主体の活動が盛んでした。

次の10年へ、建物のデザインや交通問題など5つの問題があります。なかでも、伝建地区外の景観をどう守るのか。それは、伝建地区と旧城下町の十カ町・四門前が、表裏一体とともに保存をはかることで、川越は世界に誇る歴史都市になるに違いありません。

（福川氏報告より要旨）

基調講演②「伝建制度と都市遺産の保存活用」 清永洋平氏（文化庁文化財調査官）



伝建制度は、市町村の取り組みを踏まえて、国が認定するという制度で、他の文化財とは全く違う仕組みです。地区ごとに、歴史や住んでいる人などの社会的背景も異なり、町づくりの仕方もそれぞれ異なります。

伝建は生きている文化財なので、住民だけでなく、行政や学識の先生、その他集まった人間が、みんなで知恵を出すことが必要です。また、「土地の発する声」を聞くような、土地の成り立ちや環境も配慮すべきです。そういう意味では、歴史的な町づくりを守るのは、将来世代まで見通した重要な社会運動だと思います。

（清永氏報告より要旨）

パネルディスカッション 住民主体のまちづくり

川越市と同じような都市型で、多くの観光客が訪れるような、歴史的な町並みをもつ全国の都市の中から、倉敷市と京都市で、実際にまちづくりに励む地元住民の団体と、川越町並み委員会の代表によるパネルディスカッションを行いました。

このディスカッションでは、基調講演の福川氏・清永氏に引き続き参加いただき、各都市の事例を紹介ののち、今後のまちづくりを議論しました。



①倉敷市の事例紹介 中村康典氏（倉敷伝建地区をまもり育てる会事務局長）



倉敷は戦後すぐに保存運動を開始し、昭和54年には重伝建地区の選定を受けました。結果として、地区外の建物の多くが失われてしまいました。平成18年に伝建地区の住民団体を立ち上げ、歴史的な町並みを保存することが、未来への都市計画につながるとの思いで、活動しています。（中村氏報告より要旨）

②京都市の事例紹介 長谷川 明氏（京都明倫学区まちづくり委員会委員長）



京都明倫学区という自治体は、まさに祇園祭の山鉾を出す地域ですが、その鉾よりも高いマンションの建設がまちづくりの契機でした。現状では地区の8割が新住民ですが、防災や町歩き、ルールブックの策定などに取り組み、まちを守るのがこんなにもエネルギーが必要かと日夜苦闘しています。（長谷川氏報告より要旨）

③川越市の事例紹介 原 知之氏（川越町並み委員会委員長）



川越町並み委員会では、伝建地区になる以前の昭和62年から活動を行っています。現在は伝建地区内で外観を変更する場合、すべての計画の事前協議を行い、建物だけでなく、商店の看板やのれんなども含めて、もう少しこうしてほしいといった助言の形で協議しております。

（原氏報告より要旨）

パネルディスカッション 住民主体のまちづくり ④全体討論



各地域の実情などから、伝建の制度的な有効性や限界が討論で明らかになりました。倉敷では、1年間に10%の町家が無くなった結果、伝建地区外も含めた基金を倉敷市が創出した点を紹介。京都では、伝建制度外のため、明日にでも町家が壊されるという危機感の中でまちづくりを行っている点などが紹介されました。

伝建の制度を文化的景観と融合させるなど、地区外も含めて歴史都市の景観を守るような、時代に即した新しい制度が求められることが提案されました。また、行政による制度支援の有効性やその限界を見極めつつ、住民主体のまちづくりが必要だと総括して終了しました。

閉会のあいさつ

閉会として、川越市教育委員会の新保教育長からあいさつがありました。

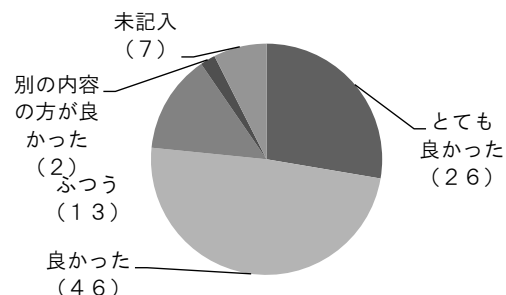
今回のシンポジウムでは、合計約310の方が参加されました。そのうち、およそ3分の1が、伝建地区や旧十カ町地域の方々と、とりわけ地元住民の関心が高いシンポジウムでした。



新保教育長

参加者からのアンケートについて

当日は94人(約30%)の人からアンケートをいただきました。内容について、とても良かった(26人・22%)、良かった(46人・40%)と、6割以上の人から好評を得ました。また、パネルディスカッションの時間が短く、もっと他地域の例を知りたいとの意見や、各地域の問題は川越も含め全国共通の悩みなど、シンポジウムを踏まえ、今後のまちづくりをそれぞれが考えるような意見が多く見られました。



今回のシンポジウムの内容については、今年の4月頃に発行する伝建20周年の記念誌の中で、詳細に報告する予定です。こちらについても、伝建地区内の方へは全戸配布する予定です。